

「迷える化石」を求めて

北川 俊一

(1)

私たち「手取層ジュラ紀恐竜探査グループ」は、45年中においても、富山・石川・岐阜・福井県下のジュラ紀層を十数回にわたって探査し、恐竜、ことに大型恐竜の発見につとめたが、何ひとつ得たものはなかった。しかし、ジュラ紀恐竜化石に関するきわめてきょうみある情報をつかんだのである。

(2)

45年6月、名古屋にある化石研究グループの機関誌中の一文中に「福井県の西谷村や美山町小和清水において、ジュラ紀のトカゲ化石が発見されている。」という一行があった。その筆者は岐阜市の小学校の先生で、化石の研究者で、岐阜県の化石研究のリーダーである。私たちはこの一行に注目した。

41年8月、私たちは美山町小和清水において、ジュラ紀の小型恐竜化石を発見している。これは日本最古の陸上背ツイ動物化石、又、日本最古の陸上爬虫類化石であった。全手取層を代表するものとして「手取竜」と名づけた。これは当時は「トカゲ化石」として報道されたので、岐阜市の先生が「トカゲ化石」とうけとっておられることはうなずける。

「西谷村のトカゲ化石」——たしかに西谷村一帯には広大なジュラ紀層が分布し、私たちはここから大量の植物化石やアンモナイト化石を採集していた。ここの地層を探査するにつけ、ここ西谷村が大型恐竜発見のきわめて有力な地域であると確信するようになってきていたのであった。

私たちは、次のような仮説を立てて研究をすすめている。「ジュラ紀末、富山—石川—福井—岐阜県にかけ、大森林と多くの湖沼が存在し、浅い海も入りこんでいた。この一帯に、小和清水で発見した手取竜のような小型恐竜が、何千何万と群れ、又、大恐竜も群れていたはずである。」西谷村で、真に、ジュラ紀の爬虫類化石が発見されていたとすれば、それはこの仮説の一つのうらづけとなるものである。

(3)

私たちは、岐阜市の先生にただちに手紙をさしあげた。(その返事は)次のような内容であった。「———西谷村のトカゲ化石は、私が37年に和泉村地方に採集旅行に行った時、朝日の人より聞いたものである。その話によると、西谷村中島の人が、長さ10cmぐらいのトカゲの化石を36

年秋に見つけた。———」

この手紙の内容、そして岐阜の先生の人から、研究歴からみて、私たちはこの手紙を信じた。

私たちはただちに西谷村へ直行した。7月末であった。ダム工事がすでに始まり、西谷村という村はすでになかった。中島に行き、山仕事で残っている村人を2人見つけ、いろいろ情報を求めたが、手がかりはなかった。西谷村から大野市へ移住した人々からも、できるかぎり情報を求めてみた。今も続けている。しかし、手がかりはまだない。

一方、化石の専門家へも連絡をとったが、「そのようなものは知らぬ。」との返事。これは予想たとおりであった。

「西谷村爬虫類化石」は、たしかに出たものと信じる。それは今どこにあるのだろうか？ 私たちも全力をあげて行くえを追及するが、誰かこの化石の行くえを知っている人はいないであろうか？ 「長さ10cmのトカゲ化石」というのは、手取竜とまったく同種の恐竜化石と考えられる。今までに、手取層からは、小和清水の手取竜がただ一つ発見されただけである。これが西谷村でも発見されていたとなれば、手取竜の分布地域はひじょうに広くなり、今後ますます多く発見の見とおしがつき、ひいては大恐竜発見への希望もうんと増大するのである。

(4)

この「西谷村爬虫類化石」のように、「迷える化石」は、日本中にひじょうに多くあるものと思われる。「化石の発見」ということは、偶然のチャンスに、その土地の人々によってなされることがひじょうに多いのである。発見した土地の人が、化石に興味を持った人であればさいわいであるが、でなければ、その化石は迷える化石」となるのである。今、日本に2つしかないマンモス化石（日本で発見されたのは3つであるが、その1つは焼失した。）の1つは、土地（北海道エリモ岬）の人が、偶然に裏山で発見し、15年間も納屋のすみのほうにほうっておいたのが、偶然、学者の目にふれたのである。

私たちは、みずからの手で直接化石を探すことの限界をよく知っている。どうしても、その土地の人々の力にたよらないわけにはいかないのである。私たちは今まで、化石産地の人々とできるかぎり話し合い、土地の人々と心の交流につとめてきた。したがって、年間に、かなり多くの情報が集まってくる。

45年9月、「大恐竜の皆ツイ骨が見つかった。」という情報が、石川県白峰村の人からとどいた。かけつけてみると、それはジュラ紀頁岩中のノジュールであった。「恐竜の歯が出た。長さ20cm」というのがあった。それは頁岩の自然のわれ目が作ったものであった。

土地の人々の見あやまり、思いちがいは多い。しかし、いつかは、土地の人が、大雨のあとのが

けくずれで、又は、ふと水を求めておりた谷川で、ほんとうに大恐竜の化石を発見するであろう。問題は、見つけても、それを捨て去ったり、納屋にほうっておくようなことがないように願うのである。

(5)

ふりかえてみると、今までにいかに多くの化石情報を私たちは受けとってきたことであろうか。記録してあるノートをふりかえてみると、何ととっても九頭竜ダム工事の時の化石情報が圧巻である。ダム工事は、ジュラ紀の、日本有数の化石産地で行なわれた。「トンネル工事の時、4mの背ツイ骨が出た。」 おそらくは、首長竜か魚竜の化石であろう。あるいは、海岸で死んだ大恐竜の化石かもしれない。「径20cmのたまごのような石が15ほど出た。」 大恐竜の背ツイ骨が流水の作用で丸くなって集まっていたものかもしれない。「径60cmのカタツムリの化石が出た。」

これはアンモナイトの化石であろう。

私たちは情報が入るたびに、できるかぎり追及した。「工事を急いで捨てさせた。ニュースになると工事を止められる。」「岐阜県の人が持って行った。」「それを大阪へ売った。」情報の追及結果は、ほとんどすべてむなしのものであった。手おくれであった。

九頭竜ダム工事のさいに出てきたおびただし化石を、だれか専門家が保存に努力したら、今、和泉村にはジュラ紀の化石博物館としては世界的なものできていたであろう。

(6)

45年中に、ひじょうにうれしいニュースがあった。12月、三国町米ヶ脇の旅館業、道場幸信さんが、自宅の増築工事中、哺乳類の化石を発見された。工事を中断し、岩盤中よりこれをていねいに取り出し、三国町教委へとどけられた。米ヶ脇層からは、断片的な植物化石は出ていたが、哺乳類化石ははじめてであり、きわめて貴重なものである。道場さんは、旅館新築のあかつきには、この化石をりっぱなケースに入れて旅館内に展示し、永久に保存したいと言われる。この貴重な哺乳類化石は「迷える化石」にならず、今後の研究のためにおおいに役立つことと信じるのである。

足羽中学校 教諭